

書 評

耐火煉瓦の歴史

—セラミックス史の一断面—

竹内清和 著

本書は我が国における耐火煉瓦の歴史として幕末時代の反射炉建設に伴う耐火煉瓦の製造をその技術の発祥として位置付け、明治、大正、昭和と耐火煉瓦の発展の歴史を、長年同界に係わった著者が豊富な資料に基づいて記録にとどめたものである。幕末時代、明治時代前・後期、大正時代、昭和時代前・後期と時代を分け、それぞれの時代における耐火煉瓦製造に係わる時代の要求、原料調達、人そして技術の織りなす歴史が詳細に述べられている。

我が国における近代製鉄技術のルーツが幕末に渡来した「ヒュゲーニンの書」にあり、時代の要求から各地で反射炉の建設が行われ、その操業の成否が耐火煉瓦にかかっており、良質な原料を国内各地に求めた耐火煉瓦の歴史の幕開けとしての幕末時代、明治前期の官民の耐火煉瓦製造史と著者が耐火煉瓦界の恩人とあげる宇都宮三

郎、西村勝三、高山甚太郎の存在と活躍、後期の大日本窯業協会（現日本セラミックス協会）の発足、八幡製鉄所建設、と耐火煉瓦との係わり、大正時代の第一次大戦、その尾をひく昭和前期と第二次大戦、黒田泰造の存在と活躍、そして昭和後期における鉄鋼業の発展に伴う耐火煉瓦技術の発展と学協会、国際技術交流の発展にまでその記述は及んでいる。また、単なる技術史にとどまらず、各時代において耐火煉瓦製造に関係する人々の情熱と悲哀をも、多くの資料を引用して紹介している。

現在急速に技術が高度化しているセラミックス技術に対して、「耐火煉瓦」という言葉を用い、さらに「セラミックス史の一断面」と副題をつけたうえでの著述は、我が国の耐火煉瓦の歴史への著者の深い愛着が感じられる。そして近年における耐火物技術協会の活躍と、関連学協会との係わり、国際技術交流の発展までに至って本書を締めくくっていることは、斯界の今後のさらなる発展を希望してやまない著者の心が伝わってくる。

耐火物を愛する人の歴史書であり、耐火物に関係する方、鉄鋼技術史に関心のある方にとって貴重な書である。

(NKK 古川 武)

A 5 判 197 ページ 定価 2060 円

1990 年 6 月 内田老鶴園発行

編集後記

この第 10 号が会員皆様の手元に届くときには、仙台の東北大学で開催される第 120 回講演大会も盛況のうちに終わっていることと思います。ここ数年講演件数は増加し、1000 件に近づこうとする勢いです。講演内容を見ますと、この増加は萌芽・境界領域分野の件数が着実に伸び、加工・システム・利用技術分野の件数が材料分野に匹敵するまでに成長していることによることがよく理解していただけるのではないかと思います。本講演会から新たに計測・システム技術が分離独立したことがこの分野の成長を裏付けていることがわかります。

このように講演件数が着実に増加していることは非常に喜ばしいことですが、「鉄と鋼」の編集を担当している者としては、この増加が協会誌への論文投稿の増加にはねかえっていないこと、特に増加した分野

(萌芽・加工・システム・計測)の論文の投稿が製鉄・製鋼・材料の分野に比べ非常に少ないことが誠に残念に思われてなりません。この原因を考えますと、前者の論文の内容が「鉄と鋼」のイメージに合わないとか、これまで掲載されている論文とは少し異質の形態になるとかといったことがつらつら考えられます。

しかし、これからの鉄鋼協会の発展を考えますと、これらの分野の論文を「鉄と鋼」に投稿していただく必要があることは言うまでもありません。そのためにも、これらの分野の論文を受け入れやすいような「鉄と鋼」に変わるような努力がなされ、どしどし投稿されるようになることを期待してやみません。

小生、協会のお手伝いしてまだ日が浅いのですが、協会内ではこういった努力が各所で活発に行われているように目に写っております。

(A. A.)